

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	本間 流星
論文題目	近代南アジアにおけるスーフィー伝統の継承と改革 —アシュラフ・アリー・ターナヴィーの存在一性論に見るイブン・アラビー学派の潮流—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、近代南アジアの思想家アシュラフ・アリー・ターナヴィー (1943年没) の著作群の分析を通じて、同地域におけるスーフィズム思想、とりわけ「イブン・アラビー学派」と呼ばれる知的伝統の展開を明らかにするものである。本論文は、7章からなる本文と序章・終章で構成されている。</p> <p>第1章は、「存在一性論」の語をめぐるイブン・アラビー学派の系譜について論じる。イブン・アラビー (1240年没) 自身はこの語を一度も用いなかったが、ジャーミー (1492年没) がこの語をイブン・アラビーの思想的立場を表す術語として用いて、存在一性論の教義体系を確立した。そのイスラーム世界各地への伝播を追い、存在一性論が一枚岩の思想体系ではなく、地域・時代の文脈に応じて多様な意味をもった点を明らかにする。</p> <p>第2章は、南アジアにおける存在一性論の潮流を論じる。従来、南アジア・スーフィズム研究者が長らく依拠してきた「イブン・アラビーの存在一性論vsスィルヒンディー (1624年没) の目撃一性論」という二項図式を、近年の研究動向を基に否定し、スィルヒンディーの目撃一性論の影響を過大評価することなく、他の潮流にも等しく目を向けるべきことを主張する。また、南アジアの存在一性論者が「一切は彼なり」というペルシア語の表現を用いることで、ヒンドゥイズムやヴェーダ哲学との宥和・混淆を特徴とする汎神論的な存在一性論の理解を浸透させた点も指摘する。</p> <p>第3章は、ターナヴィーが生きた近代南アジアにおけるイスラームの潮流を概観する。当時のイスラームの危機に直面して、ターナヴィー自身の属するデーオバンド派などスンナ派ウラマー諸流派がイスラーム改革運動を興したが、宗派間対立により、近代南アジア・ムスリム社会は統合と分断の間を揺れ動いた。また本章では、ウラマー勢力・スーフィー諸流派に加え、モダニズムやイスラーム主義の諸勢力の影響力を指摘し、近代南アジア・ムスリム社会が「イスラームのモザイク」の様相を呈していたことを明らかにする。さらに、ウラマーが改革思想普及のための主要言語としてウルドゥー語を選択し、同言語が南アジア・ムスリムにとっての象徴的言語となった点に注意を喚起する。</p> <p>第4章は、「ウンマの賢人」の尊称で知られるターナヴィーに関する情報を、生涯・著作・研究史の観点から整理する。著作については、近代南アジアでムスリムらの象</p>			

徴的言語として普及したウルドゥー語による著述を重視し、自己改革の必要性をウルドゥー語で分かり易く説いたことを指摘する。研究史サーベイでは、彼が改革思想の中心的手段にスーフィズムを据えたことを明らかにする。

第5章では、ターナヴィーのイブン・アラビー擁護論を、南アジアを中心に検討する。イクバルなど近代主義的ムスリム知識人の敵対視に対して、彼はイブン・アラビー擁護の書をウルドゥー語で執筆した。ターナヴィーが自身の立場をスィルヒンディーのそれと同一視したことから、後者をめぐる言説の連続性が見られることを示す。

第6章は、ターナヴィーのスーフィズム観と存在一性論を論じる。彼にとってスーフィズムはシャリーアに包摂されるがゆえに、存在一性論のようなスーフィー形而上学も含め、その根拠の全てをクルアーンとハディースに見出すことができる。本章では、ターナヴィーが、通常は汎神論と理解される「一切は彼なり」というテーゼを神の遍在性と超越性の双方を保持する視座と見做すことで、汎神論とは明確に異なる存在一性論の理解を示したことを明らかにする。

第7章は、「一切は彼なり」に基づいたターナヴィーの存在一性論の更なる解明を目指し、彼の存在顕現の形而上学を考察する。絶対者の自己顕現の永続性や遍在性、その中での被造物や人間の役割といった点において、ターナヴィーはイブン・アラビーの影響を大きく受けており、こうした存在顕現論が遍在的な神観念を軸とする彼の存在一性論を支えていることを明らかにする。これらを踏まえて、近代南アジアにおけるイブン・アラビー哲学の伝承者を自認するターナヴィーは、その教説を忠実に継承し、簡明なウルドゥー語で定式化することによって、当時の南アジアの知的潮流に普及させようとした役割を果たしたと結論づける。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、一般にイスラーム改革者にとらえられている、近代南アジアの思想家ターナヴィーの著作群の分析を通じて、同地域におけるスーフィズム思想、とりわけ「イブン・アラビー学派」と呼ばれる知的伝統の展開を明らかにするものである。

南アジアのイスラームに関する研究は「二重の周縁化」にさらされてきた。南アジア研究のなかでは、ヒンドゥー教というマジョリティの陰に隠れるマイノリティとして周縁化され、他方イスラーム研究のなかでは、アラブ・中東中心主義の観点から周縁イスラームの一部と見なされてきた。しかし南アジアは、ムスリム数6億人をかかえ、世界ムスリム総人口の約3分の1が住む地域である。本論文は、この重要な南アジア・イスラームに関する研究である。

本論文の学術的価値は、以下の五点に集約することができる。

第一に、イスラーム改革者として知られているターナヴィーを、イブン・アラビー学派のメンバーとして位置づけ直したことが挙げられる。本論文は、以前の南アジア研究では単に保守派として括られてしまうことの多かった、植民地統治下のムスリム・ウラマーたちの思想、特にターナヴィーの思想の新規性を明らかにすることに成功している。近代におけるイスラーム改革は、一方で世俗化を伴う近代化、他方でクルアーンとスンナ（預言者ムハンマドの言行録）への原典回帰を主張し、イスラーム法や戒律を強調するイスラーム主義と共に語られることが多く、その文脈ではスーフィズムは、むしろ前近代の遺物として、攻撃の対象となってきたと多く理解されてきた。これに対して本論文は、ターナヴィーがスーフィズムをイスラーム改革の核に据えたことを明らかにした。

第二は、上の点と密接に関連して、スーフィズムとシャリーアに関する独特の見方を分析したことである。従来、「シャリーア（イスラーム法）対スーフィズム（イスラーム神秘主義）」およびそれぞれの担い手である「ウラマー（イスラーム学者）対スーフィー（イスラーム神秘主義者）」という図式が語られてきた。しかし本論文は、スーフィズムをシャリーアの一部とするターナヴィーの見解を分析する。そのなかで、スーフィズムの中でも、汎神論につながりかねないとしてしばしば非難の対象となってきた存在一性論をシャリーアの基礎と見なしていることを発見したことは、大きな功績である。

第三に、近代南アジアにおいて、新しい公用語・学術語になったウルドゥー語で書くことの政治的・文化的意味合いについて丁寧に議論したことが挙げられる。従来からのイスラーム思想の公用語・学術語であったアラビア語・ペルシア語に加えて、時にはそれよりもむしろ、ウルドゥー語で執筆することを戦略的にターナヴィーが選んだことの意味を、本論文は明らかにしている。

第四に、近代南アジアの主要言語であるウルドゥー語文献を中心としつつも、アラビア語・ペルシア語、その他ヨーロッパ諸語の文献を丹念に博搜していることが挙げられる。一次資料のみならず、二次資料についても、驚くほど幅の広い目配りがなされており、文献学の鑑とも呼ぶべき論文である。

上に述べてきたことを総合して、最後の第五点として、南アジア地域研究・イスラーム世界論研究という二つの学問領域を架橋し、その両方に貢献していることが挙げられる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2024年1月9日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。